Langevin Dynamics の多項式エルゴード性

Ergodic Lower Bounds

司馬博文

7/05/2024

Abstract

目標分布の裾が重ければ重いほど、Langevin 拡散過程の収束は遅くなる。本記事ではその様子を、平衡分布との全変動距離について、定量的に評価する。

Rⁿ 上の Langevin 拡散を考える:

$$dX_t = -\nabla V(X_t) dt + \sqrt{2\beta^{-1}} dB_t, \qquad X_0 = x. \tag{1}$$

ただし,

$$V(x) = O(|x|^{2k}) \qquad (|x| \to \infty)$$

の仮定をおく. $k \ge 1/2$ の場合,指数エルゴード的であるが, k < 1/2 の場合はそうではない.

 $k \in (0,1/2)$ の設定で、次の ergodic lower bound を示したい:

$$C_1 \exp\left(c_1 V(x) - c_2 t^{\frac{k}{1-k}}\right) \le \|P_t(x, -) - \mu_*\|_{\text{TV}}$$
 (2)

 $\mu_*(dx) \propto e^{-\beta V(x)} dx$

この lower bound から, $k \in (0,1/2)$ の場合, Langevin 過程 X が指数エルゴード的たり得ないことが従う.

式 (2) を示すためには, $G(x) := e^{\kappa V(x)} (\kappa \in \mathbb{R})$ に対して,

$$\mathbb{E}_{x}[G(X_{t})] \leq g(x,t)$$

を満たす関数 g を見つける必要がある (Hairer, 2021, pp. 34-35).

これは次の3ステップを辿る

- 1. そもそも $E_{\star}[G(X_{\star})]$ < ∞ であることの証明 (第 1 節).
- 2. G に関するドリフト条件 $P_t \widehat{L} G \leq C \varphi \circ G$ から、 $E_x[G(X_t)]$ の t に関する微分不等式を導く(第 2 節).
- 3. 微分不等式から、Gronwall の補題より、結論を得る(第3節).

1 $G = e^{\kappa V}$ の可積分性について

次元n=1で考えてみる.

 $V(x) = \frac{x^2}{2}$ とした場合, X は OU 過程になり,

$$\mathrm{E}_{\mathrm{x}}[G(X_t)] < \infty \quad \Leftrightarrow \quad t < -\frac{1}{2}\log\left(1 - \frac{\beta}{\kappa}\right).$$

 $V(x) = \log x$ とした場合, X は Bessel 過程になり,

$$\mathrm{E}_x[G(X_t)] < \infty \qquad (\forall_{t>0}).$$

 $k \in (0,1/2)$ の場合、 ∇V が有界であることに注目すれば、Bessel 過程の場合と同様に

$$\mathrm{E}_x[G(X_t)]<\infty \qquad (\forall_{t>0}).$$

1.1 はじめに

Markov 過程 X に関するドリフト条件

$$\widehat{L}V \leq -C\varphi \circ V$$
 on $\mathbb{R}^n \setminus K$

からは $V: E \rightarrow \mathbb{R}_+$ の可積分性が出る:

$$E_x[V(X_t)] < \infty$$
 $t \ge 0$.

証明

上のドリフト条件を, (Hairer, 2021) の最も弱い意味で解釈すると

$$M_t := V(X_t) + C \int_0^t \varphi \circ V(X_s) \, ds$$

が任意の $x \in E$ に関して P_v -局所優マルチンゲールである、ということになる.

これだけの仮定でも,V が下に有界であるために M_t も下に有界であり,下に有界な局所優マルチンゲールは(真の)優マルチンゲールであることから,

$$\mathbb{E}_{x}\left[V(X_{t})+C\int_{0}^{t}\varphi\circ V(X_{s})\,ds\right]\leq V(x).$$

加えて左辺が下に有界であることから、 $E_{x}[V(X_{t})] < \infty$ でないと矛盾が起こる.

しかし, lower bound を得たい場合,

$$\widehat{L}V \le C\varphi \circ G$$
 on \mathbb{R}^n (3)

という情報のみから,

$$\mathbb{E}_{x}[G(X_{t})] \leq g(x,t) (< \infty)$$

という評価を得る必要が出てくる.この場合, $E_x[G(X_t)]<\infty$ は非自明で,ケースバイケースの議論がである.

1.2 OU 過程の場合

An overdamped Langevin dynamics on $\mathbb R$ is defined as the solution to the following SDE:

$$dX_t = -\nabla V(X_t) dt + \sqrt{2\beta^{-1}} dB_t, \qquad X_0 = x_0$$

If $V(x) = \frac{x^2}{2}$, X becomes an Ornstein-Uhlenbeck process. Transforming via $f(t,x) = xe^t$ and using Itô's formula, we get

$$X_t = x_0 e^{-t} + \sqrt{2\beta^{-1}} \int_0^t e^{-(t-s)} dB_s.$$

Hence, *X* is a Gaussian process with $X_t \sim N(x_0e^{-t}, \beta^{-1}(1 - e^{-2t}))$.

In this case, expectation with respect to $G(y) = e^{\kappa V(y)} = e^{\frac{\kappa y^2}{2}}$ ($\kappa \in \mathbb{R}$) is given by

$$\begin{split} \mathrm{E}_{x}[G(X_{t})] &= \int_{\mathbb{R}} G(y) \frac{1}{\sqrt{2\pi\beta^{-1}(1-e^{-2t})}} \exp\left(-\frac{(y-xe^{-t})^{2}}{2\beta^{-1}(1-e^{-2t})}\right) dy \\ &= \frac{1}{\sqrt{2\pi\beta^{-1}(1-e^{-2t})}} \int_{\mathbb{R}} \exp\left(\frac{\kappa\beta^{-1}(1-e^{-2t})y^{2} - (y-xe^{-t})^{2}}{2\beta^{-1}(1-e^{-2t})}\right) dy. \end{split}$$

Taking a closer look at the numerator inside exp,

$$\kappa \beta^{-1} (1 - e^{-2t}) y^2 - (y - x e^{-t})^2$$
$$= y^2 \left(\kappa \beta^{-1} (1 - e^{-2t}) - 1 \right) - 2x e^{-t} y + x^2 e^{-2t}.$$

Therefore, we conclude

$$\mathrm{E}_x[G(X_t)] < \infty \quad \Leftrightarrow \quad \kappa \beta^{-1}(1-e^{-2t}) < 1.$$

In other words, $P_tG(x)$ is finite as long as

$$t < -\frac{1}{2}\log\left(1 - \frac{\beta}{\kappa}\right).$$

1.3 Bessel 過程の場合

 $V = a \log x$ ととると、 $V'(x) = \frac{a}{x}$ であるから、これに関する Langevin 動力学は、 $\beta = 1$ のとき、

$$dX_t = -\frac{a}{X_t} dt + dB_t$$

と、母数 a を持つ Bessel 過程になる。ただし、0 への到着時刻 T_0 で止めたもの X^{T_0} を考える.

[@Lawler2019 p.10 命題 2.5]

母数 a を持つ Bessel 過程 X^{T_0} の密度を $q_t(x,y;a)$ で表す. このとき,

$$q_t(x,y;1-a) = \left(\frac{y}{y}\right)^{1-2a} q_t(x,y;a)$$

$$q_t(x,y;a) = q_t(y,x;a) \left(\frac{y}{x}\right)^{2a}$$

$$q_{r^2t}(rx, ry; a) = \frac{1}{r}q_t(x, y; a)$$

加えて $a \ge \frac{1}{2}$ でもあるとき,

$$q_1(x, y; a) = y^{2a} \exp\left(-\frac{x^2 + y^2}{2}\right) h_a(xy),$$

 $h_a(x) \sim \frac{1}{\sqrt{2\pi}} x^{-a} e^x \qquad (|x| \to \infty)$

この結果は (Lawler, 2019, p. 59) をみる限り、修正 Bessel 関数と、Bessel 過程の Fokker-Planck 方程式との考察によって証明されている.

$$G(y) = e^{\kappa V(y)} = e^{a\kappa \log(y)} = y^{a\kappa}$$

であるから、密度 $q_t(x,y;a)$ に対してはどうやっても可積分である.

1.4 k < 1/2 の場合の尾部確率

k < 1/2 で最も大きく変わる点は、

$$\nabla V(x) = O(|x|^{2k-1}) \qquad (|x| \to \infty)$$

であるために、 ∇V が \mathbb{R}^n 上で有界になることである.

このため、一般に SDE

$$dZ_t = b(Z_t) dt + \sigma(X_t) dB_t$$

の密度が、任意のT > 0 に対して、ある $A_T, a_T > a$ と $y \in \mathbb{R}$ が存在して

$$\frac{1}{A_T \sqrt{2\pi t}} e^{-\frac{a_T |y-x|^2}{2t}} \le p_t(x, y) \le \frac{A_T}{\sqrt{2\pi t}} e^{-\frac{|y-x|^2}{2a_T t}}$$
$$t \in (0, T]$$

が成り立つことが使える. *1

これによれば,

$$G(x) = e^{\kappa V(x)} = O(e^{\kappa |x|^{2^k}}) \quad (|x| \to \infty)$$

に対して p_t の尾部が勝つため、 $P_tG(x) < \infty$ である.

1.5 k < 1/2 の場合の G の可積分性

k < 1/2 の場合,式 (1)のドリフト係数が有界になる.このことから、Gの可積分性が、 X_t の密度の考察に依らず次のように導ける.

$$M := \max_{x \in \mathbb{R}^n} \nabla V(x)$$

^{- &}lt;sup>†1</sup>(Kohatsu-Higa et al., 2022) で最初に知った.特に (Kohatsu-Higa, 2003) は詳しく扱っており,上からの評価は Malliavin 解析から得られる (Taniguchi, 1985). 同様にして熱方程式の基本解としても捉えられるが.

と定める. $V(x) = O(|x|^{2k})(|x| \to \infty)$ より、ある C > 0 が存在して、

$$V(x) \le C|x|^{2k}$$
 on \mathbb{R}^n .

$$|X_t| \le \int_0^t |\nabla V(X_t)| \, dt + \sqrt{2\beta^{-1}} |B_t|$$

$$\le Mt + \sqrt{2\beta^{-1}} |B_t|$$

より,

$$\begin{split} \mathrm{E}_{x}[|G(X_{t})|] &\leq \mathrm{E}_{x}\left[e^{\kappa V(|X_{t}|)}\right] \\ &\leq \mathrm{E}_{x}\left[\exp\left(\kappa V(M_{t}+\sqrt{2\beta^{-1}|B_{t}|})\right)\right] \\ &\leq e^{\kappa|Mt|^{2k}}\,\mathrm{E}_{x}\left[e^{\kappa 2^{k}\beta^{-k}|B_{t}|^{2k}}\right] < \infty. \end{split}$$

2 微分と拡張生成作用素の関係

 (X_t) を $E = \mathbb{R}^n$ 上の Feller-Dynkin 過程, (P_t) をその遷移半群, \hat{L} をその拡張生成作用素とする.

命題2

 $G \in \mathcal{D}(\hat{L})$ とする. すなわち,

$$t \mapsto M_t := G(X_t) - \int_0^t \widehat{L}G(X_s)ds$$

は任意の $x \in E$ について P_x -局所マルチンゲールである.

このとき、さらに G について次の条件を仮定する:

- 1. $E_x[|G(X_t)|] < \infty$ $(x \in E, t \in \mathbb{R}_+)$. すなわち、 $P_tG : E \to \mathbb{R}$ が定まる.
- 2. 同様に $E_x[|\hat{L}(G)(X_t)|] < \infty$ $(x \in E, t \in \mathbb{R}_+)$. すなわち, $\hat{L}P_tG : E \to \mathbb{R}$ も定まる. †2
- 3. $t \mapsto P_t \widehat{L}G(x)$ は局所有界.

このとき、 $P_tG(x)$ は t で微分可能であり、次が導ける:

$$\frac{\partial}{\partial t} \operatorname{E}_{x}[G(X_{t})] = \operatorname{E}_{x}[\widehat{L}G(X_{t})].$$

これは、通常の意味での生成作用素 L の性質

$$\frac{\partial}{\partial t} P_t G = P_t(LG)$$

が、可積分性の条件の下で、拡張生成作用素 î にも引き継がれると理解できる.

証明

仮定より、停止時の列 $\tau_n \nearrow \infty$ a.s. が存在し、任意の $n \in \mathbb{N}$ について、 M^{τ_n} はマルチンゲールで、

$$E_{x}\left[G(X_{t\wedge\tau_{n}})-\int_{0}^{t\wedge\tau_{n}}\widehat{L}G(X_{s})ds\right]=G(x), \qquad t\geq 0, x\in E.$$

$$\tag{4}$$

 $^{^{\}dagger 2}$ 元々はある正の定数C>0が存在して, $\widehat{L}G\leq CG$.ある凹関数 φ について $\widehat{L}G\leq \varphi\circ G$ が成り立つならばこの仮定は満たされることに注意,としていた.

仮定 1 より $E_x[|G(X_{t \wedge \tau_n})|] < \infty$ であるから,

$$\mathbb{E}_{x}\left[\left|\int_{0}^{t\wedge\tau_{n}}\widehat{L}G(X_{s})ds\right|\right]<\infty.$$

でもある. 従って Fubini-Tonelli の定理から

$$\mathbb{E}_{x}\left[\left|\int_{0}^{t\wedge\tau_{n}}\widehat{L}G(X_{s})ds\right|\right] = \int_{0}^{t}\mathbb{E}_{x}\left[\mathbb{1}_{[0,\tau_{n}]}(s)\widehat{L}G(X_{s})\right]ds$$

と書き換えられる.

よって、式(4)は

$$\operatorname{E}_{x}\left[G(X_{t\wedge\tau_{n}})\right] = G(x) + \int_{0}^{t} \operatorname{E}_{x}\left[1_{[0,\tau_{n}]}(s)\widehat{L}G(X_{s})\right] ds$$

とも表せる. 右辺が t について微分可能であるから, 左辺も微分可能である:

$$\frac{\partial}{\partial t}\operatorname{E}_x\bigg[G(X_{t\wedge\tau_n})\bigg]=\operatorname{E}_x\bigg[\mathbf{1}_{[0,\tau_n]}(t)\widehat{L}G(X_t)\bigg].$$

両辺の $n \to \infty$ に関する極限を取ると,右辺は $|\widehat{L}G(X_t)|$ が P_x -可積分であるから(仮定 2),Lebesgue の優収束定理より,

$$\lim_{n\to\infty}\frac{\partial}{\partial t}\operatorname{E}_{x}[G(X_{t\wedge\tau_{n}})]=\lim_{n\to\infty}\operatorname{E}_{x}\left[1_{[0,\tau_{n}]}(t)\widehat{L}G(X_{t})\right]=\operatorname{E}_{x}[\widehat{L}G(X_{t})], \qquad x\in E, t\in(0,\infty).$$

加えてこの収束は、 $t \in (0,\infty)$ に関して広義一様に起こる。実際、Hölder の不等式より、 $^{\dagger 3}$

$$\begin{split} \sup_{t \in [0,T]} \left| \frac{\partial}{\partial t} \operatorname{E}_{x}[G(X_{t \wedge \tau_{n}})] - \operatorname{E}_{x}[\widehat{L}G(X_{t})] \right| \\ &= \sup_{t \in [0,T]} \left| \operatorname{E}_{x}[1_{[0,\tau_{n}]}(t)\widehat{L}G(X_{t})] - \operatorname{E}_{x}[\widehat{L}G(X_{t})] \right| \\ &= \sup_{t \in [0,T]} \left| \operatorname{E}_{x} \left[(1 - 1_{[0,\tau_{n}]}(t))\widehat{L}G(X_{t}) \right] \right| \\ &\leq \sup_{t \in [0,T]} \operatorname{E}_{x} \left[(1 - 1_{[0,\tau_{n}]}(T))|\widehat{L}G(X_{t})| \right] \\ &\leq \|1 - 1_{[0,\tau_{n}]}(T)\|_{L^{\infty}(\Omega)} \sup_{t \in [0,T]} \operatorname{E}_{x} \left[|\widehat{L}G(X_{t})| \right] \xrightarrow{n \to \infty} 0. \end{split}$$

最後の不等式にて, 仮定3による局所有界性

$$\sup_{t \in [0,T]} \mathbf{E}_{x} \left[|\widehat{L}G(X_{t})| \right] < \infty$$

を用いた.

この導関数の一様収束と、Lebesgue の優収束定理による各点収束

$$E_x[G(X_{t \wedge \tau_n})] \xrightarrow{n \to \infty} E_x[G(X_t)]$$

を併せると、 $E_{\star}[G(X_{\star})]$ も可微分で、その導関数は極限

$$\frac{\partial}{\partial t} \operatorname{E}_{x}[G(X_{t})] = \lim_{n \to \infty} \frac{\partial}{\partial t} \operatorname{E}_{x}[G(X_{t \wedge \tau_{n}})] = \operatorname{E}_{x}[\widehat{L}G(X_{t})]$$

として得られることが結論づけられる.

 $^{^{+3}}$ sup $\hat{L}G(X_t)$ は可積分とは限らないため,sup を期待値の中に入れることはできない.Hölder の不等式により,これを迂回できる. $_{t\in[0,T]}$

[@Rudin-Principles p.152 定理 7.17]^{†1}

 $^{\dagger 1}$ [@杉浦光夫 1980 p.311] 定理 13.7 系では、 f_n に C^1 -級の仮定を置いて、この場合は f が C^1 -級になることを導いている.

 $f_n:[a,b]\to\mathbb{R}$ を可微分な関数列とし,ある関数 $f:[a,b]\to\mathbb{R}$ に各点収束するものとする. 仮に,導関数列 $\{f_n'\}$ が一様位相に関して Cauchy 列ならば, $f_n\to f$ も一様収束し,加えて f も可微分で,

$$\lim_{n\to\infty}f'_n(x)=f'(x)$$

が成り立つ.

3 下界の導出

元来の目的である下界の導出のためには,

$$E_x[G(X_t)] \le CG(x) \exp\left(ct^{\frac{k}{1-k}}\right)$$

という評価を得る必要がある. Gronwall の不等式を用いれば、導関数に関する不等式

$$\frac{\partial}{\partial t} \operatorname{E}_{x}[G(X_{t})] \leq \operatorname{E}_{x}[\widehat{L}G(X_{t})] \leq C \operatorname{E}_{x}[\varphi \circ G(X_{t})]$$

があれば十分である. この導関数に関する不等式は、命題 2 とドリフト条件(3)

$$\widehat{L}G \leq C\varphi \circ G$$

を併せることで,

$$\frac{\partial}{\partial t}\operatorname{E}_x[G(X_t)] = \operatorname{E}_x[\widehat{L}G(X_t)] \leq C\operatorname{E}_x[\varphi\circ G(X_t)]$$

より得る.

参考文献

Hairer, M. (2021). Convergence of markov processes.

Kohatsu-Higa, A. (2003). Lower bounds for densities of uniformly elliptic non-homogeneous diffusions. In E. Giné, C. Houdré, and D. Nualart, editors, *Stochastic inequalities and applications*, pages 323–338. Basel: Birkhäuser Basel.

Kohatsu-Higa, A., Nualart, E., and Tran, N. K. (2022). Density estimates for jump diffusion processes. *Applied Mathematics and Computation*, 420, 126814.

Lawler, G. F. (2019). Notes on the bessel process.

Taniguchi, S. (1985). Applications of Malliavin's calculus to time-dependent systems of heat equations. *Osaka Journal of Mathematics*, 22(2), 307–320.